

二つの石濱家に見る幕末から 大正期の淡路の先進性について

石 濱 裕美子

はじめに

石濱純太郎一家の漢学、史学、教育、文学など多領域にわたる事績については夙に知られている。漢学者として泊園書院の最後の院主をつとめ、その後、同院を関西大学の文学部へと昇華させ、日本の東洋史学のパイオニアとして活躍し、チベットの学会をはじめとする数々の学会を創設した。また、長子恒夫、同居する甥の藤澤恒夫はいずれも小説家として名をなし、その家は安岡章太郎をして「関西文壇の一角になっている」といわしめる程であった（安岡 一九六六・十四）。

このような純太郎一家の多彩な活動は、同じく淡路島にルーツをもつ人々の明治・大正期における多領域での活躍の中でとらえることも可能である。純太郎と同年に、淡路に生まれたマルクス経済学者大内兵衛（一八八八

「一九八〇」が「淡路は大阪、神戸の郊外みたいところで、文化的に進んでいた」と言ったように（大内 一九五五・二三）、淡路は海を通じて京阪のみならず、四国、九州、遠くは北海道の函館にもつながり、常に最新の情報に接していたことから、幕末、明治・大正の激動の時代、政界・経済界・学界の最前線で活動する人材を輩出した。

幕末の洲本においては、頼山陽（一七八〇―一八三二）の親友である篠崎小竹（一七八一―一八五二）が益習館で、山陽の高弟である岡田鴨里が学問所で教鞭をとり、津井村の庄屋古東領左衛門（一八一九―一八六四）が天誅組に資金供与を行うなどしていたため、土佐、長州、九州から幕末の志士が往来し、洲本は志士たちのたまり場の感を呈していた。

明治に入ると、阿波は土佐に発した自由民権運動の波に洗われ、いち早く設立された政治結社である阿波自助社は徳島に慶應義塾大学を誘致した。自助社が閉社の後も淡路人は政論系あるいは政党系新聞の発行に努力し、新聞界に多くの人材を提供した。純太郎一家の活躍はこのような淡路人の活躍の延長としてもとらえることができる。

純太郎一家に影響を与えたと思われる淡路人脈の中で、本稿が特に注目するのは、一家に先んじて、漢学、ジヤーナリズム、経済学、文学に人材を輩出した徳右衛門系石濱家の存在である。明治初期の同家の当主石濱鐵郎は、儒学者岡田鴨里の曾孫イマを娶り、戦前の五大紙のうち二つ『時事新報』、『報知新聞』（後の読売新聞）で新聞人として活躍し、四人の子はそれぞれ経済学、文学、実業界で名をなした。純太郎父子については多くの先行研究があるため、本稿ではこの徳右衛門系石濱家とその妻イマの実家の岡田鴨里四代に焦点を絞り、基礎的なデータを提供していきたい。

一 二つの石濱家

石濱純太郎父子と、その祖父勝藏、父豊藏三代の墓は淡路島の洲本の遍照院に現存する。遍照院は江戸期には青蓮寺と地藏寺という高野山真言宗の寺であり、大正末期に青蓮寺が焼失した後、二寺が合併して現在の遍照院となった。

明治十九年に編纂された青蓮寺の墓石簿には、当時青蓮寺に存在した墓石の主とその施主と明治十九年当時の管理者の名前がリスト化されている。この中で石濱姓をもつ墓主をピックアップし管理者を見ていくと、「土族」石濱鐵郎を管理者とする三十一人と、「石濱屋」の屋号をもつグループの十五人とに二分される。純太郎の父勝藏はこの石濱屋の屋号をもつグループの中におり、石濱多十郎、石濱屋多助、石濱多十郎の娘、氏名不詳者の四つの墓の管理者となっている。以下にこの二つの石濱家の由来について主に過去帳と墓石簿に基づいて考察してみよう。混乱を避けるために、以下、純太郎の家系を石濱屋系、石濱鐵郎の家系を徳右衛門系と称する。ちなみに、いずれの石濱家も過去帳や戸籍などの公式書類において「濱」は共通して「濱」の字体を用いている。

(一) 石濱屋系グループ

まず石濱屋について考察しよう。郷土史家の武田清市氏によると、石濱屋は尾張に起源をもち、江戸初期に蜂須賀家の淡路支配の起点であった由良に移住し、由良引けとともに洲本の街道筋（通町）に居住区を割り当てら

れて、洲本を代表する商家となった（武田 一九八九・七十七・七十八）。蜂須賀家は秀吉の直臣となって阿波を治める前には尾張海東郡蜂須賀村の出であったことから（岡田 一八七六・十七）、石濱屋は蜂須賀家とともに尾張から阿波に移住してきた集団であると思われる。延宝年間以後阿波藩は農工商を分離したものの、洲本においては宝暦・明和以後も、町人の下役への登用などが随時行われていた。明和（一七六六）には藩政改革の一環として藩に融資を行った者には名字・帯刀が許されるようになり、石濱屋半兵衛は文化年間に名字帯刀を許されている（武田 一九八九・八十二、九〇・九十一）。

遍照院に残る青蓮寺の過去帳によると、石濱屋の名で最も古い記録は天和四年正月（一六八四）に没した石濱屋半兵衛（戒名・性海眞澄）と、その三年後の貞享四年二月（一六八七）に没した石濱屋半兵衛父（俗名・九郎左衛門・戒名・恵雲高照）である。

明治維新の後、純太郎の祖父石濱勝藏は明治維新の波にのりそこねて破産したものの、父豊藏が創業した丸石商会（現丸石製薬）は順調に発展し、純太郎は東京大学卒業とともに家督をつぎ、丸石製薬合名会社社員となった。そのため、終生経済的に苦勞することはなく研究に打ち込めたのである（大庭脩 一九九四）。

（二）徳右衛門系グループ

次に徳右衛門系石濱家について述べる。鐵郎を戸主とした原戸籍によると、前戸主は鐵郎の父徳一であり、以下、祖母マチと二人の姉の名が記されている。マチは祖父徳右衛門妻、亡曾祖父徳右衛門長女と記されていることから当主は江戸期に徳右衛門号を承襲していたことがわかる（系図参照）。青蓮寺の過去帳をひもとくと石濱

徳右衛門本人ないしその係累の名が時代を超えて見いだせる。もっとも古い例としては正徳二年（一七二二）二月二十五日に没した石濱徳右衛門娘（戒名：了夢童子）と享保十年（一七二六）五月になくなった石濱徳右衛門（戒名：樹光宗政）の二人があげられる。

徳右衛門が江戸期に淡路でどのような仕事についていたかは江戸期の古文書から伺い知れる。一七二五（享保十）年に伊加利村庄屋の仲野安雄（一六九四―一七七八）の手になる文書「阿那賀町送り付御訴訟のこと」の宛先である三人の郡付奉行のうち、一人が石濱徳右衛門である。この三人のうち徳右衛門を除く二人、すなわち角村新右衛門、池沢左吾右衛門の名は貞享二（一六八五）年の「下物部橋架橋普請について」という文書にも見られ（淡路古文書学習会編…二十二）、この文書における三人目の手代の名は石濱甚三郎となっている。阿波藩では一六九三（元禄六）年に、国奉行をおき郷方所務にあたらせ、一七〇〇（元禄十三）年に国奉行の郷方所務が廃止され郡奉行三人がおかれたので（洲本市史編纂委員会…九六四）、角村新右衛門、池沢左吾右衛門、石濱徳右衛門の三人は、この時郡手代に任ぜられたと思われる。貞享二年から正徳二年までの期間に徳右衛門号の承襲が始まったことを考え合わせると、推測の域を出ないものの、石濱姓のものが手代職についたことを契機に徳右衛門号の名乗りを始めた可能性はある。

この後も一七三八（元文三）年に記された参勤交代の際の人足の手配書（淡路古文書学習会編…四十二）中、一七七三（安永七）年に記された徳島で急死した洲本の商人中島屋喜兵衛の跡目相続についての文書中にも相続に係わった役人の一人に徳右衛門の名がみえる（淡路古文書学習会編…五十七）。また、砂川家文書の一八〇九（文化六）年九月、一八二五（文政八）年九月、一八三六（天保七）年八月の書簡にも徳右衛門の肩書きは「津名郡御郡代様御手代」であり、また、一八八三（嘉永六）年の洲本の役付き武士の席順を示す文書「須本諸士役付并席

順姓名記」でも町手代と記されていることから（洲本市史編纂委員会…一四九）、徳右衛門は江戸期を通じて奉行所で手代を務めていたことが分かる。

石濱鐵郎の屋敷は原戸籍や登記簿によると「津名郡洲本常盤町八十九番」にあり、一八五六（安政三）年に写された洲本の古地図によっても常盤町に石濱徳右衛門の名が確認できる。禄制改革の後、手代は九等士族となつたため（洲本市史編纂委員会…六四八・六四九）、明治に入つて生まれた鐵郎は墓石簿や慶應義塾の入学名簿において「士族」の肩書きを冠している。

（三）両グループの関係

石濱屋系は商人、徳右衛門系は武士階層に属していたため、公的には別グループである。しかし、過去帳において石濱屋半兵衛の名が十七世紀後半から見える一方、徳右衛門は十八世紀初頭より登場すること、前述したように阿波藩では藩政に協力した商人を下役に取り立てていたことなどから、十七世紀末から十八世紀初頭に石濱屋の一人が手代にとりたてられ、その子孫が徳右衛門系となったという可能性が考えられよう。

二つの石濱家はいずれも明治になると淡路をでて大阪、東京に移住した。純太郎の父豊蔵は大阪において製薬業を起こし、その子息純太郎は東大を卒業した後、東洋史学者としてまた漢学者として名をなした。石濱鐵郎は大正末期に儒者岡田鴨里の曾孫イマを娶り、淡路をでて大阪から東京に移住し、明治・大正期新聞界で活躍しつつ、四人の男児（知行、金作、三男、秀雄）を儲けた。長男知行は九州帝国大学の経済学部教授となり、次男金作は川端康成とともに新感覚派を開き、三男は仏文学者、四男秀雄は八幡製鉄の取締役となった。洲本を起源と

する両家は、古い世代ほど互いを認識しており、後述するように、一九二三年に夭折したイマの従兄弟秀夫の葬儀では、葬列に鐵郎や大内兵衛の長兄の名が見え、純太郎も香典を送付しており、純太郎の長男石濱恒夫も金作を遠戚と認識していた。

鐵郎の家系には徳右衛門系の系図が伝わっていたが、一九四五年の山の手大空襲で焼失した。この系図が存在していれば石濱屋との関係の詳細も判明したと思われるが、現時点で分かることは以上である。

次に、鐵郎の妻イマの家系である儒者岡田鴨里とその学統をついだ三人と石濱鐵郎父子の事績を見ていきたいと思う。

二 岡田鴨里とその三人の継承者

イマの曾祖父である岡田鴨里は幕末の志士たちの愛読書である頼山陽の代表作『日本外史』を書き継ぎ志士の事績を記録した歴史家であり、かつ、藩の御儒者として学問處で教鞭を執る教育者でもあった。その学統を接いだ嫡孫眞、養子文平、秀夫三代も漢学者であり、文平以後は帝国大学の教壇に立つて漢学を教授したため、岡田家の漢学とその著作は地域・時代を超えて継承されていた。以下に岡田家四代の事績を岡田鴨里関連文書群に基づき概略を述べる。

(一) 岡田鴨里 (一八〇六一—一八八〇)

岡田鴨里は諱を僑、字を周輔といい、淡路島の王子村(現淡路市)の庄屋砂川佐一郎の四男に生まれ、掃守村(現南あわじ市)の豪商岡田家の養子となった。⁸⁾ 鴨里の号はこの掃守(かもり)村の名にちなんだものである。一八二八(文政十一)年、二十二才で京都に出て晩年の頼山陽に師事し、山陽の遺囑を受けて、二十年後に『日本外史補』十四巻を脱稿し、その稿本を一八五〇(嘉永三)年安中藩の板倉甘雨(一八〇九—一八五七)に献じた。⁹⁾ この功により鴨里は一八六一(文久元)年九月、徳島藩主蜂須賀治昭によって藩の学問處として創設されたもので、¹⁰⁾ 洲本学問所は一七九八(寛政十)年徳島藩主蜂須賀治昭によって藩の学問處として創設されたもので、鴨里の実兄である砂川藍谷や、中田謙斎・藤江石亭等などが教鞭をとった(洲本市史編纂委員会、四一八—四二二)。

周知のように頼山陽の『日本外史』は勤王の志士の愛読書であり、その学統を継ぐ鴨里の史伝も大義名分論を説くものであり、書も山陽のそれに酷似している。鴨里は頼山陽の息子の頼三樹三郎(一八二五—一八五九)や森田節斎(一八一—一八六八)を始めとする志士達と深く交わり、¹¹⁾ 次女カツが嫁いだ津井村庄屋古東領左衛門は、尊皇攘夷運動の頂点で勃発した天誅組の大和拳兵に連座し獄死している。¹²⁾ 木戸孝允(一八三三—一八七七)の蔵書に鴨里の代表



岡田鴨里

作「日本外史補」と本書の「列伝」にあたる『名節録』三卷（岡田鴨里関連文書D.No. 270-272）が含まれていること、大隈重信の著作『開国大勢史』においてもゴローウィン事件についての資料として、藤澤甫（東暎）と岡田僑（鴨里）兩名の高田屋嘉兵衛伝が典拠として記されていることなどは、鴨里の著作が幕末から明治にかけて広く読まれていたことを示している（大隈一九一三・四九二）。

鴨里の著作は同時代資料としても見るべきものがある。江戸の最末期の一八六六（慶應二）年、「吾耻四山十畝喬人」の筆名で幕末日本外交の裏面史『草莽私記』五卷（岡田鴨里関連文書D.No. 270-283）を著し、志士たちの事績を記録した。また、鴨里の評伝・旅日記などを集めた『鴨里文稿』（岡田鴨里関連文書D.No. 284-289, 291）の巻1には、鴨里が『外史補』を献じた際の「上板倉甘雨公書」、庚午事変の年の十月に記した「訃庵記」、第三巻には頼山陽の高弟森田節斎との交友を記した「節斎文鈔序」、徳島藩士であり天誅組に加わろうとして逮捕された伊藤聴秋（一八二〇―一八九五）によせた文「伊藤聴秋詩鈔跋」、最後の洲本城代稲田植誠（一八四四―一八六五）の墓誌「國老稲田君墓表」、一八六六（慶應二年）年に没した三原町甚大村地頭方村の医師の墓誌「沼田丈庵墓表」（一八二五―一八六六）、「露液翁表伝」、「青木九萬墓表」、西淡町湊の伊藤海の伝「林滄浪翁小伝」、「紀節婦津田氏事」、日露の外交交渉にあたったことで著名な高田屋嘉兵衛（一七六九―一八二七）の最古層の伝記「高田屋嘉兵衛伝」など同時代人の伝が並ぶ。文稿には、頼山陽、篠崎小竹、森田節斎、昌平黉の斎藤拙堂（一七九七―一八六五）、塩谷宕陰（一八〇九―一八六七）ら、当代きつての儒者たちの硃批が附されており、鴨里の若年よりの秀才ぶりが知れる。

明治元年、鴨里は徳島藩の参政を任じられ、翌年学校懸准物頭席に任ぜられた。一八七〇（明治三）年の庚午事変にあたっては、本藩派の説論につとめたものの事変を防げず（新見一九六六b・十六―十七）、同年官界を去

った。一八七二（明治五）年十月、蜂須賀家の歴史を編年体にとめた『蜂須賀家記』を上梓して藩に対して最後の奉公をした後、一八七八（明治十二）年九月に掃守村に帰村して一八八〇（明治十三）年九月五日に舌がんで死去した。

頼山陽の著作は幕末から敗戦直前まで広く読まれ、日本人の国体意識の形成に一役かったことはよく知られている。淡路の知識人にとっても頼山陽の『日本外史』が特別なものであったことは、大内兵衛が敗戦直前の一九四五年の一月に記したエッセーからも見て取れる。兵衛は山陽を「天才」と呼び、「日本外史」を最高の史書と評し、『外史』が牢中で書き始められた経緯を詳説した後、河上肇を現代の山陽としてその清貧を激賞している（大内一九六九・三十五―四十二）。戦後、頼山陽の著作は危険視され、山陽やその弟子岡田鴨里に対する研究者の関心は無きに等しい状態となっている。しかし、マルクス経済学者である兵衛が山陽の大義名分思想を範としていたことが示すように、山陽の思想は幕末から敗戦まで、あらゆる日本人の心性に影響していた。日本人の国体意識の形成や時代の空気を解明する上でも外史や外史補の研究は引き続き必要な作業であると言えよう。

（二） 岡田真（一八四六―一八七六）

鴨里はスマ、カツ、ヤスの三人の娘をなした。このうち、スマが与一郎を養子に迎えて岡田家を継ぎ、二人の間にうまれた男子が、『岡田周輔成立書』において鴨里の跡継ぎとされた岡田真である。¹⁵

真は字を真太郎、号を颯斎（さつさい）という。純太郎は『泊園』誌上において自らの蔵書として凌雲祖秀の詩集『禪余集』を紹介し、同書の撰者であり序文を記した岡田真を「鴨里先生の嫡孫で、余の先輩故岡田秀夫學士の伯父に當る

人。」と記し、続いて片山（一九二九）所載の真の小伝を引用している。岡田真がこの『禪余集』を撰した文久三（二八六三）にまだ十七才であることを鑑みると、その早熟ぶりが知れる。さらに跋を記した大村純安（二八五〇—一八七〇）について、純太郎は「明治初年の淡路の動搖即徳島藩政紛擾事件で死を賜はった志士の一人である。純安の實弟鹿島秀磨代議士と余の先考（豊蔵）とは何か交際があつた様である」と記している。¹⁶ここにありように岡田真と大村純安は庚午事変（徳島藩政紛擾事件）の際にともに檄文を記し、事変後純安は切腹を命じられた。¹⁷この『禪余集』の序と跋は二人の早くからの交友を裏付ける資料と言える。

庚午事変の後、真は謹慎を命じられ、謹慎が解けた後は、一八七二（明治四）年八月に徳島県の権大属に、一八七二（明治五）年九月には名東県の権典事に任ぜられた。しかし、一八七三（明治六）年八月に辞職し、東京に遊学する。¹⁸真が役人を辞した理由は、淡路における自由民権運動の高まりと無縁ではないだろう。

一八七四（明治七）年一月、板垣退助らが「民選議員設立建白書」を提出し、四月に土佐に立志社を創立した。これに刺激され、四ヶ月後の八月には徳島においても阿波自助社が結成され自由民権運動が高揚した。そしてこの阿波自助社の七人の発起人のうちの一人が真である。¹⁹岡田真は「自助社結社大意」（岡田鴨里関連文書のNo. 508）中で、人は生まれながらに天から基本的人権（権利通議）を賜っており、これを保つためには政府に頼るのではなく、自らを治め、独立不羈でなくてはならない。この権利を保全する道を広げるために、法律を始めとする諸般とともに講究・合議する結社を作るという主旨を述べている。

自助社は翌一八七五（明八）年二月、板垣退助を阿波に招いて政府批判の演説会を行い、四月十四日に「漸次立憲体制樹立の詔」が公布されると、七月に慶應義塾大学（校長・矢野龍溪）を徳島に誘致し、八月にはこの詔を一般に向けて解説する「通諭書」を作成・配布し民権運動の宣伝に利用しようとした。

しかし、一八七六（明治九年）九月、大審院はこの通諭書を朝憲紊乱にあたるとし、関係者四名は処罰され（通諭書事件）、徳島慶應義塾は閉鎖され、自助社も一八七八（明治十二年）年、関係者の協議によって閉社となった。

真は通諭書事件の二ヶ月後の十一月、東京で客死し、上野の海禪寺の塔頭、智光院に埋葬された。海禪寺は江戸期に臨済宗妙心寺派の四大触頭の一つであり、蜂須賀家の加護があつことから「阿波様寺」の通称で呼ばれていた。同寺の過去帳によると真の戒名（覺心院尚古願齋居士）には院号がつけられており、このような由緒ある寺で丁重に弔われたことから、真が旧阿波藩の人脈の中で礼をもつて遇されていたことが分かる。

真の遺体はその後改葬され、現在は掃部村の鴨里の隣に眠っている。墓石に記された岡田真の字は四国大学の太田剛教授の鑑定によると沼田存庵（一八二五―一八九九）の手になるとのことである。前述したように鴨里は存庵の父丈庵の伝を記しており、存庵自身は鴨里の実兄砂川藍谷の弟子であり、華岡青洲に西洋医学を学んだ儒医である。また、弟の苔堂はイギリスの外交官アーネスト・サトウ（一八四三―一九二九）の日本語通訳として名高い。この進取の精神に富む沼田一族と鴨里・真が親交を結んでいたことは淡路の先進性を考える上でも興味深い。



岡田真 墓

真の夭折後も自助社の精神は生き続け、阿倍喜平が主催する洲本の私塾積小軒で学んだ三木善八、徳島慶應義塾の校長であった矢野龍溪らの門下生は、明治の新開界で活躍し中央政府と対峙した。これについては後に鐵郎の項で詳述する。

(三) 岡田文平（一八六〇—一九〇〇）

一八八〇（明治十三）年に鴨里が没した後、真の二人の娘のうちの一人、長女のアイの婿文平が家督を継いだ。岡田鴨里の名が見える最古の戸籍は文平を戸主とし、鴨里を前戸主とするもので、扶養者として真の妻セン、真の長女アイ、次女イマ、文平とアイの間に生まれた一男二女の名が並ぶ。

文平は奥井寒泉（一八二六—一八八六）門下で学び、岡田家から古東家に養子にはいった古東又五郎とともに門下の双壁と謳われた（片山一九二九・四七三）²⁰。文平は近代的な学制の中で漢学をまなぶ道を選び、一八八三（明治十六）年九月に、帝国文科大学（現東京大学）古典講習科漢書課乙部へ入学し、一八八七（明治二十）年七月に同課を卒業した。東京大学は一八七七年に創立したばかりであり、さらに、開設されたばかりの古典講習科漢書課（二期で募集停止）に即座に入学している事より、岡田家が時流の先端をいく家風を有していたことが知れる。帝大卒業後、文平は一八八八（明治二十一年）には第二高等中学校（現東北大学の前身）の助教諭と漢文学と国文学の教授を兼任し、一八九一（明治二十四）年六月に教授へと昇任した。しかし、一八九七（明治三十）年七月病により辞職し、四十才の若さで一九〇〇（明治三十三年）年に歿した。

(四) 岡田秀夫（一八八四—一九二三）

岡田文平が没した後、鴨里の学統をついだのは一八八四（明治十七）年に岡田和三郎・フジ（一八五七—一九三一）夫妻の間に生まれた岡田秀夫である。岡田和三郎は鴨里の長女スマの婿与一郎が、スマの死後に後添えとの

間に儲けた子であるため、鴨里と血のつながりはない。しかし、秀夫は鴨里の次女カツの曾孫である静子を娶ったため、秀夫の子供たちには鴨里の血が入ることとなった。この婚姻から大正期においても与一郎系岡田家は鴨里の血筋を追っていたことがわかる。

秀夫は文平と同じく学制の中で漢文を教育する道に進み、一九一〇（明治四十三）年に、東京帝国大学文科（漢文学・文法を専攻）を卒業した。この二年後の一九〇八年、純太郎は同じ東京帝国大学文科大学（現東京大学）支那文学科に入学し、一九一一年に卒業した。当時支那文学科の定員は四人から六人と小規模であり、かつ、二人は同郷であることを念頭におけば、純太郎が秀夫を「余の先輩」といった言葉の深さが伝わってくる。

卒業の前年父豊蔵が歿したため、純太郎は家業を継ぐべく卒業後は大阪に戻り、東洋学と関西の教育・文化の振興につとめた。これとは対照的に、秀夫が歩んだのは帝国大学における教職の道であった。一九一四（大正三年）九月には札幌帝国農科大学（現北海道大学）の講師に、一九一六（大正五年）年十二月に広島高等師範学校（現広島大学）の講師に任用され、一九一八（大正七年）年四月には教授に昇進した。一九二二（大正十一年）年三月、父の和三郎の死亡に伴い家督を相続したが、その翌年の一九二三（大正十二年）年八月、帝国学士院の在外研究員として北京に留学中、北京の日華同仁病院において急逝した。文平と同じく享年四十才の若さであった。

岡田秀夫の葬儀帳（岡田鴨里関連文書「No. 760」）には秀夫の履歴、葬儀の際の状況などが記録されているが、葬列には石濱鐵郎、大内兵衛の長兄大内宗次郎らがつらなり、死亡通知先には、石濱純太郎は無論のこと、指導教授であった東京大学の岡田正之（一八六四―一九二七）、東京帝国大学教授で中国哲学者の服部宇之吉（一八六七―一九三九）、頼成一、東京帝国大学名譽教授で漢学者の塩谷温（一八七八―一九六二）、言語学者の中目覚（一八七四―一九五九）、広島高等師範学校の斯波六郎（一八九四―一九五九）、重建懷徳堂初代専任教授の松山直藏（一

八七一―一九二七）等、錚々たる漢学者・言語学者らが並んでいる。岡田鴨里関連文書は秀夫の妻、静子が保管していたものを静子の孫岡田至が二〇〇九年に神奈川県立歴史博物館に寄贈したものである。

三 石濱鐵郎とイマの息子たち

ここで、いよいよ徳右衛門系石濱家の直系である石濱鐵郎（一八七〇―一九三二）と、彼と岡田真の娘イマ（一八七四―一九四〇）の間に生まれた四人の子のうち、淡路人脈とも関わりの深い知行、金作の事績についてふれる。

（一）石濱鐵郎（一八七〇―一九三二）

鐵郎は庚午事變のおきた一八七〇（明治三）年に生まれ、十一才の時に父の死を受けて戸主となり、一八八九（明治二十二）年四月に慶應義塾大学に入り、翌年七月に別科を卒業した。²¹ 現存する慶應義塾の卒業生（塾員）名簿をたどると、鐵郎の住所は一八九三（明治二十六）年には須本（洲本）、一八九六（明治二十九）年には東京の芝区四国町、明治三十三年には東京の京橋區築地、身分は時事新報社員、と変遷しているため、²² 一八九三年から一八九六年の間に鐵郎の拠点は淡路から東京に移ったことがわかる。家伝ではイマが鐵郎を促して上京したといい、一八九四（明治二十七）年に二十四才の鐵郎はイマを娶っているため、家伝は事実である可能性が高い。純太郎

の父豊蔵が純太郎の生母が没した後、漢学者日柳燕石の孫娘を娶ったのは、イマが鐵郎に嫁いだ翌年であり、純太郎の姉カツが泊園書院三代院主の藤澤黄坡に嫁いだのは八年後の一九〇二年である。鐵郎とイマの結婚がこれらの事例に先行していることを指摘しておきたい。

眞の妻センは鐵郎が一九〇四年に日露戦争に出征するに当たり、東京の鐵郎宅に「当主見舞い」に行き腸チフスに罹って客死した（岡田鴨里関連文書 No. 76）。センにとって鐵郎が「当主」とされていることは、岡田文平の死後、岡田秀夫が学業を終え一家をなすまでは、イマの夫である鐵郎が岡田家の当主を兼務していた可能性を示唆している。

鐵郎が時事新報社に入社したことについては、淡路人が明治の初期より新聞界で広く活躍していた事実を指摘するべきであろう。イマの父岡田眞が発起人の一人となった阿波の自助社は国政参加を目指していたが自助社は通論書事件の後に衰退したため、新聞縦覧所をもとにした小結社が作られはじめた。一八七七（明治十）年、洲本の儒学者阿倍喜平が『淡路新聞』を創刊し、三年後に同紙は神戸に進出して阿倍門下の鹿島秀磨が主幹、同じく門下の三木善八が代表をつとめる『神戸新報』が生まれた。鹿島秀磨は前述したように庚午事変の後切腹した大村純安の実弟であり、純太郎の父豊蔵と交際があった名士である。秀磨は明治九年に慶應義塾を卒業している（鹿島秀磨 一九九一・二五四―二五五）。

一八八一年、「明治十四年の政変」により大隈重信が下野し自由民権運動が弾圧されると、翌一八八二（明治十五）年、福沢諭吉は「官民調和」「不偏不党」を掲げて日刊紙『時事新報』を創刊し、一方、大隈重信が矢野龍溪（阿波慶應義塾の元校長）とはかり立憲改進黨の機関誌にするべく『郵便報知新聞』を買収した。いずれも十年後の国会開設を視野にいたれた行動である。

『時事新報』は慶應義塾の出身者によって作られ、初期は学内で印刷されていたため、慶應義塾を卒業した淡路人であり、かつ、自助社の発起人の娘を娶った鐵郎が、新聞人となつて時事新報社に入社したことは自然の流れであつたと思われる。三木善八は新聞経営の才に富んでいたため、一八八六（明治十九）年、社長の矢野龍溪に招かれて経営難の『郵便報知新聞』社に入社し、一八九四（明治二十七年）年に社主となつた後は『報知新聞』と改題し、大衆向けの紙面づくりに励み、経営の立て直しに成功した。鐵郎はこの三木に引きぬかれて『時事新報』から『報知新聞』の用度部長職に転職し、定年までを過ごした（日本新聞年鑑、片山一九二九・三五一）。鹿島秀磨は一八九〇（明治二十三）年の第一回衆議院選挙に当選したことを皮切りに合計八回当選し、神戸を代表する代議士となり市の発展に尽くした。

次に、鐵郎とイマの間に生まれ、いずれも東京大学を卒業し、経済学者と小説家となつた長男知行と次男金作について述べよう。

（二）石濱知行（一八九五—一九五〇）

鐵郎とイマの間に長男として生まれた石濱知行は、一九二〇年に東京帝国大学法学士政治学科を卒業した。これに先立つこと七年前に、同科からは前述した著名なマルクス経済学者大内兵衛が卒業している。兵衛も知行も日本史中の人であり、彼らの思想、受けた迫害については多くの先行研究があるため、ここでは同郷同世代の経済学者としての共通性に留意しつつ二人の人生を略述する。

大内兵衛は鴨里の掃部村に隣接した松帆村の中規模農家に、父万平・母シナの間には九人兄弟の六男として生を



昭和九年 いま、知行、和子、朗子

枯盛衰の歴史を聴きながら育った（菊川一九六六・一三九、大内一九五五・二一三二）。父から隣村の名儒者鴨里やその師頼山陽について聞いたことが兵衛の山陽熱の始まりであろう。兵衛は当初は歴史家を志していたが、河上肇が訳したセリグマンの「歴史の経済的説明・新史観」を読んだ後、歴史を理解するためには経済を知らねばならぬと、一九一一年に東京大学法学士経済科に入学した（菊川一九六六・一三九―一四一）。

卒業後の進路について「官界にいくか、学界に残るか、…新聞記者になりたい」と思い悩んだ三択の中に、新聞記者が入っていることに（大内一九五五・七七八）、新聞界で淡路人が活躍していた世相を感じ取れる。兵衛は結局官界に進み大蔵官僚をへて一九一九（大正八）年に新設の東京帝国大学経済学部助教授に着任した。しかし、翌年森戸事件に連座して免職となり、ドイツ留学を経て一九二三（大正十二）年に復職した。さらに、時局柄一九三七年に再び検挙され、無罪が確定した後に大学を辞職した。戦後は東京大学に復職し、後に法政大学総長に

受けた。生年は純太郎と同年である。男兄弟は石濱家と同じくそれぞれが多領域で活躍し、長男宗次郎は漢詩文をよくし三原郡の書記として地方自治につくした。ちなみに、岡田秀夫の葬儀に石濱鐵郎とともに参列したのはこの宗次郎である。次男幸三郎は藤澤南岳の門下生であり、母の山口家について県会議員となって自由民権運動に挺身した。三男愛七は海軍少将、四男亀吉は養子に出るも夭折、五男（要は満鉄庶務課長となったが四十六才で夭折、六男が大内兵衛である。兵衛は幼き日、父より淡路の豪農や名家の栄

なり、社会党の設立にもかかわるなど、マルクス経済学の大御所として名を残した。

一方、石濱知行も兵衛と同じく帝大卒業後、ドイツ留学を経て九州帝国大学に着任したものの、一九二八（昭和三年）に三・一五事件の余波でおきた九大事件で向坂逸郎（一八九七―一九八五）、佐々弘雄（一八九七―一九四八）とともに教壇を追われ（一九二八年四月二十二日付「朝日新聞」）、以後読売新聞（報知新聞の後継紙）の論説委員となり「筆一本の浪人生活」を送った。九大を追われた直後に知行は向坂逸郎とともに上京し、高円寺に家を借りると、終戦の年に空襲で焼け出されるまでここに住んだ。母イマはこの家の離れで一九四〇年に歿している（石濱知行 一九四七）。

戦後一九四六年、知行は九州帝国大学に復職したものの（一九四五年十一月二十四日付「朝日新聞」）、一九五〇年に結核により死亡した。葬儀は駿河台の政経ビル内の中国研究所の所葬とされ、大内兵衛が葬儀委員長となった（一九五〇年八月二日付「読売新聞」夕刊）。当時中国研究所は、日本統計研究所、大原社会問題研究所、国民経済研究協会の三法人とともに、東亜研究所（初代総裁・近衛文磨）の後身の政治経済研究所に統合され、政経ビル内に入っていた。大内兵衛は当時この政治経済研究所の常務理事をつとめており、知行も中国研究所所員の肩書きをもっていたため所葬となったのであろう。

大内兵衛が東京帝国大学に入学した一年前の一九一〇年に岡田秀夫が同大文科を卒業しており、入学した同年の一九一一年に、石濱純太郎は同大の文科を卒業している。純太郎一家は関西の文化、教育、学界の振興者としてのイメージが強いが、その子息恒夫も甥の藤澤恒夫も京都大学ではなく、東京帝国大学を卒業している。この理由として淡路人脈の影響を考慮することもできよう。

(三) 石濱金作 (一八九九—一九六八)

純太郎、イマの次男石濱金作は川端康成 (一八九九—一九七二) と同年であり、両者は一高で出会い揃って一九二〇年に東京帝国大学英文學科に進み (石濱金作一九五〇b)、在学中の一九二二年に第六次『新思潮』を創刊し、一九二四年には『文藝時代』の創刊にもかかわり、それらに発表した評論や小説により、新感覚派として一世を風靡したことは文学史上よく知られている。

一九二五 (大正十四) 年三月、石濱純太郎の甥である藤澤桓夫 (一九〇四—一九八九) は大阪高校の文科生を中心とした九人で同人誌『辻馬車』を創刊した。藤澤桓夫は同誌に「冬の花」という短編小説を発表し、川端康成がこれを文芸時評において好意的にとりあげたため、桓夫は新進の小説家として早くから注目された (藤沢 一九八一・一四七—一五〇)。この『辻馬車』の出版翌年の一九二六年七月号には金作が「覗く」という短編小説を、八月号にはその金作の弟三男が「鰯つり」という短編小説を、同号に純太郎の弟石濱敬次郎も一文を寄稿していることから、桓夫・敬次郎、金作・三男の両石濱家は当初は協力関係にあったことが分かる (石濱金作 一九二六、石濱三男 一九二六、石濱敬次郎 一九二六)。



菅忠雄 川端康成 石濱金作 中川与一 池谷信三郎

しかし、川端康成や横光利一や菊池寛たちが芥川龍之介にならってストイックな生活を送っていたことに比し（藤沢一九八一・一六五―一六七）、金作は酒飲みであつた。金作は菊池寛、直木三十五とともに銀座のバーを徘徊し、一九三〇年、菊池のひいきの女給と駆け落ちしたことを契機に文壇から離れ、一九三六年に菊池の斡旋で帝国馬匹協会会誌の主筆となつた後は、戦後まで創作から遠ざかつた（井上謙一九六八）。

戦後、金作は文壇を離れた時期をこう回想している。

「あれはもう駄目だ。放っておくより仕方がない」と、私の十数年来の学生時代からの親友である川端康成は、道徳的に私の不しだらを苦々しく思つて心で非難していた。私はもう文学も教職も妻も子も何もかも、はかなく、空々しくつて、只無名の、巷間の庶民の生活に憧れた（石濱金作一九五〇a・六十二）。……

やはり私には若干の心の引け目があつた。大袈裟に云えば、昔ならお手打ちである。主人の思い者を、主人がまだそれを手に入れぬうちに私が取つてしまつたのである（石濱金作一九五〇a・六十三）。……

私がたつえに惹かれたのは、きっとその破滅への誘惑であつたに違いない。破滅の神がたつえを通じて私を呼びにきたのである。たつえが私と菊池氏の間に立ち塞がり、横光利一、池谷信三郎が私に向かつて忠告し、近藤柏次郎がその末路の模範を示し、川端康成が私を呪詛するのは、皆この破滅から私を救ってくれる爲の、人間的な温情だつたのだらう。しかしとうとう私はそれに捕らえられた（石濱金作一九五〇a・六十五）。

このような状態になった後、菊池寛をとりまく文壇の若手が石濱金作について言及しにくくなったことは想像に難くない。藤澤桓夫は一九二六（大正十五）年に東京帝国大学文学部国文科に入学し、一九三一年に卒業した後は肺病に罹患していたことから帰阪し、純太郎の屋敷に同居した。ちなみに、鐵郎の四男秀雄は桓夫とほぼ同時期に東京帝国大学経済学部在籍していた。

藤澤桓夫が一九四一年に発表した小説『新雪』の主人公の青年のモデルはこの年東京帝国大学文学部美術史学科に入学した純太郎の長男恒夫（一九二三―二〇〇四）である（安岡 一九六六・一四）。石濱恒夫は自宅内にある藤澤桓夫の蔵書を通じて川端のファンとなり、大阪高校一年生だった一九四〇年に、母のつくったお重を新大阪のホテルに滞在する川端に届けた際に、川端と初対面した（茨木市立川端康成文学館 一九八九・二〇・二十一）。後に恒夫は川端康成の弟子となり、ノーベル文学賞を受賞するオスロの旅に同行したことはあまりにも有名である。しかし、川端にとって石濱といえば一高時代からの友、金作であった。恒夫も以下の様に回想している。

また、兵隊に行く時、今、文学館にあるでしょ、日章旗に寄せ書きの。あれをもって川端さんのところへお訪ねしたんです。

「ごめんください。石濱です」と言ったら、石濱金作さんとま違ってね、

「金作さーん」と川端さんがパツと出てきてね

「ああ、君ですか」と言ったのを覚えています。

石濱金作さんのご先祖は、淡路島の洲本で、僕とこもそうです。系図みたいなもん残ってませんが、きつとだったらご先祖が一緒に、遠い親戚なんでしょう。そういう親しみもあったんですけど違いますか（茨木市立川

端康成文学館 一九八九・二二三

川端も

私の裏町好みの共犯者は、石濱金作氏であつた。一高に入学すると直ぐから結ばれた石濱氏との交友は、全く共犯者といふ言葉しかないような深入りであつた。書くこと多過ぎて書く気にもなれぬ。二身一体の因果者のやうに、相手が鼻につくことが自己嫌悪と同じに近い友人だつた（川端 一九三四）

といい、当の金作も「一方は文壇の最高峰で、一方は文壇の浪人だが、でも二人は三十年来の友人であつた」（石濱金作 一九五〇b・六十二）と言うこれらの言葉は、石濱金作と川端康成の長い縁を示しており、それは恒夫や恒夫と川端の關係に先行するものとして銘記しておくべきであろう。

おわりに

以上、両石濱家の歴史を、關係する淡路人とともに幕末から終戦に至るまで概観してきた。要点をまとめると以下のようになる。

岡石濱家は大正末期まで洲本の青蓮寺を菩提寺としていた。純太郎、祖父、父、子息恒夫の墓は現在も青蓮寺の後継寺院である遍照院に存在する。

両家ともに漢学の家との婚姻関係を築いた。一八九四年に石濱鐵郎が岡田鴨里の曾孫である岡田イマを娶った後、純太郎の父石濱豊藏が一八九六年に日柳燕石の孫娘を娶り、一九〇二年に、純太郎の姉カツが漢学者藤澤黄坡に嫁いだ。

帝国大学指向について言えば、鴨里の養子岡田文平（一八八七）が設立されたばかりの東京帝国大学の漢文科に入ったことを皮切りに、岡田秀夫（一九〇九）、石濱純太郎（一九一一）、大内兵衛（一九一三）、鐵郎・イマの子である石濱知行（一九二〇）、金作（一九二四）、秀雄（一九三一）三兄弟、純太郎の甥の藤澤恒夫（一九三一）、子息恒夫が、この順番で東京帝国大学を卒業した。つまり、純太郎本人も長男も甥も関西を拠点にしての活動で名をなしたにも拘わらず、東京大学を指向していることは注目すべきであろう。

藤澤恒夫は処女作を川端康成に認められて文壇にデビューし、石濱恒夫も川端康成を師と仰いでいた。そして、川端康成と石濱金作との一高以来の交友関係は恒夫と恒夫二人と川端の関係に先んじていた。

これらのことは、純太郎一家の行路選択にあたっては、徳右衛門系石濱家や岡田家が先行モデルとなつて直接・間接に影響していた可能性を示唆しているよう。

岡田鴨里の子孫は女系である上に、孫も婿も三代続いて夭折した。曾孫のイマがなした息子たちも、石濱知行は復職後まもなく肺病で歿したため、戦後も活躍した大内兵衛、向坂逸郎二大学者の影に隠れた。大正末期には石濱・川端と文壇でもはやされた石濱金作も一九三〇年に文壇から離れ、人々の記憶から消えた。しかし、通観すれば彼らは尊皇攘夷運動、自由民権運動、マルクス思想研究、大正期の文壇などその時代その時代を象徴す

る時流が始まる時、その中心において活動していた人々であった。同郷の純太郎一家の先行モデルとしてだけではなく、淡路の知識人の先進性の具体例としても見るべきものがあるであろう。

参考文献

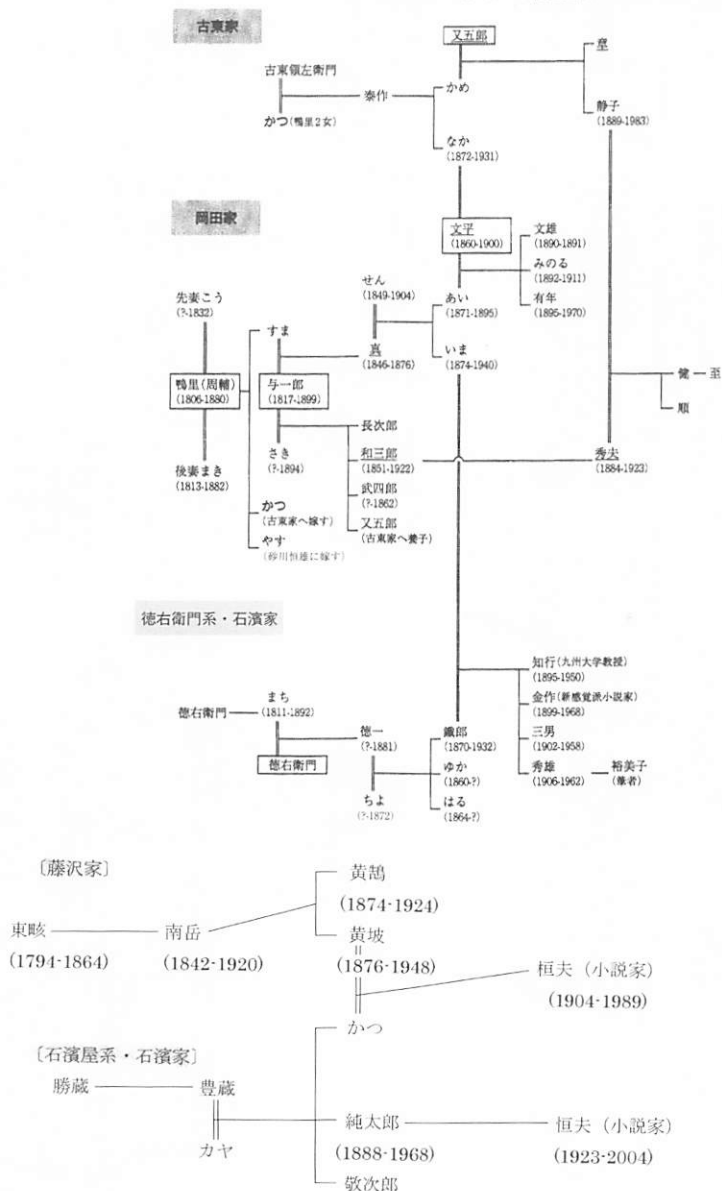
- 淡路古文書学習会編（一九九五）『淡路の近世文書』洲本市立淡路文化資料館
淡路資料館編（一九九四）『淡路三原町八木島田家文書』平成六年第一集
池内輝雄（二〇〇四）『時事新報目録文芸篇大正期』八木書店
石濱金作（一九二六）『覗く』『辻馬車』17：二一七
石濱金作（一九五〇a）『青春行状記——人間・菊池寛』『改造文芸』2（5）：五十二—六十六
石濱金作（一九五〇b）『無常迅速——青春修行記』『文藝読物』9（5）：六十二—八十五
石濱敬次郎（一九二六）『Adonis's assoulti』『辻馬車』17：二十五—二十八
石濱恒夫ほか（一九七四）『川端康成……その人・その故郷』婦人と暮しの会出版局
石浜知行（一九四七）『僕の住宅問題』『商工人』時事通信社：三十一—三十四
石濱三男（一九二六）『鯉つり』『辻馬車』18：二一七
石濱裕美子（二〇一六）『神奈川県立歴史博物館蔵「岡田鴨里関連文書」』『史観』175：一一六—一四三
井上謙・保昌正夫作製（一九六八）『石濱金作年譜 改訂』『日本現代文学全集』67 新感覚派文学集 講談社：四四二—四四三
茨木市立川端康成文学館（一九八九）『川端康成その人と故郷』茨木市教育委員会
大内兵衛（一九五五）『私の履歴書』河出新書
大内兵衛（一九六九）『忘れえぬ人』角川選書
大隈重信（一九一三）『開国大勢史』早稲田大学出版部
大庭脩（一九九四）『石濱純太郎』江上波夫編『東洋学の系譜』大修館書店：一五一—一六一

- 岡田鴨里（一八七六）『蜂須賀家記』東洋社
- 「岡田鴨里関連文書」神奈川県立歴史博物館所蔵。（Cf.石濱裕美子二〇一六）
- 「岡田周輔 成立書并系圖」徳島大学付属図書館蔵データ番号：HC00002979
- 鹿島秀麿（一九九二）『行路の灯』日本編集社
- 片山嘉一郎編（一九二九—三三）『淡路之誇』実業之淡路社
- 川端康成（一九三四）『文学的自叙伝』『新潮』五月号
- 菊川兼男（一九六六）『西淡町風土記』西淡町教育委員会
- 慶應義塾編（一九二四）『慶應義塾々員名簿』慶應義塾
- 慶應義塾福澤研究センター編（一九八九）『福澤関係文書 福澤論吉と慶應義塾』『マイクロ資料』雄松堂書店
- 新聞研究所『日本新聞年鑑』
- 洲本市立淡路文化史料館編（一九九八）『淡路文化史料館収蔵史料目録第十五集』津名町旧王子村庄屋砂川文書
- 洲本市史編纂委員会編（一九七四）『洲本市史』洲本市
- 高見沢恵子（一九九六）『石濱金作の歩み』『淵藪』5
- 武田清市（一九八九）『近世淡路史考』近代文藝社
- 東京大学三学部編（一八八四）『東京大学法理文三学部一覽』丸屋善七
- 東京帝国大学編（一九三三）『東京帝国大学卒業生氏名録』九善
- 徳島県立文書館編（二〇〇一）『阿波の自由民権運動』徳島県立文書館
- 新見貫次（一九六六a）『淡路の新聞と新聞人』『兵庫史学』43：十八—三〇
- 新見貫次（一九六六b）『岡田鴨里』兵庫県教育委員会他
- 新見貫次（一九七〇）『淡路史』のじぎく文庫
- 西松五郎（一九七九）『神戸又新日報』略史』『歴史と神戸』18：二—四〇
- 平田真玄管理（一八八六）『淡路國津名郡川傍町 青蓮寺墓石簿』遍照院所蔵
- 藤沢恒夫（一九八一）『大阪自叙伝』中公文庫
- 安岡章太郎（一九六六）『良友・悪友』新潮社

二つの石濱家に見る幕末から大正期の淡路の先進性について

下線は戸主と確認できた人。□は養子を示す。—は婚姻関係

史観第一七五冊



一四二

一七九四			全国の動き		岡田家と徳右衛門系の動き	藤澤家と石濱屋系の動き
一八〇六					岡田鴨里、阿波藩淡路島に生誕。	藤澤東暎、高松藩に生誕。
一八二五						藤澤東暎、大阪に泊園塾を開く。
一八二六		頼山陽「日本外史」上梓。				
一八二八					岡田鴨里、京都において頼山陽に師事する。	
一八三一		頼山陽、没。			山陽没。鴨里に「日本外史」の補綴を背くことを託す（「日本外史補」序）。	
一八五〇					岡田鴨里「日本外史補」を板倉甘雨に献ず。並びに「名節録」を著す。	
一八五一			藤本鉄石来淡。			
一八五三		ペリール来航				
一八五五			頼頼三樹三郎来淡。			
一八五六			三木善八、生誕。			
一八六〇		三月 桜田門外の変	稲田植誠、一五代洲本城代に。			
一八六一		ロシア船が二回、紀州より由良に入港（洲本市史）。七月第一次東禅寺事件。			岡田鴨里、中小姓格にとりたてられ、洲本学問処の御儒者に任ぜられる。	
一八六二		・五月 第二次東禅寺事件。 ・八月 薩英戦争。 ・九月 生麦事件・アーネスト・サトウ横浜に着任。				
一八六三		五月 下関戦争	天誅組の變			

二つの石濱家に見る幕末から大正期の淡路の先進性について

一八七三	明治六年		稲田邦植、北海道静内に移住。	岡田真辭職、東京へ遊学。	藤澤南岳、泊園書院を大阪に再興。
一八七二	明治五年		『郵便報知新聞』創刊。	・岡田鴨里、「蜂須賀家記」を脱稿。・岡田真、名東県の権典事に任ぜらる。・砂川藍谷没。	
一八七一	明治四年		稲田家臣団、北海道へ移住。・廃藩置県により徳島藩は徳島県に。十一月名東県に。	岡田真、徳島県の権大属に任ぜらる。	
一八七〇	明治三年		庚午事変勃発。	岡田鴨里、庚午事変を未然に防ごうとするも果たせず。徳島藩の参政の職を辞す。石濱鐵郎生誕。	
一八六九	明治二年		版籍奉還により阿波、淡路が徳島藩に。蜂須賀茂韶が徳島藩主になる。	岡田真、長崎、薩摩を探索。	
一八六八	明治元年	・志士の名替回復に靈山護國神社建設。・戊辰戦争（一八六九）	・小室信夫、徳島藩士に取り立てられる。	岡田鴨里、徳島藩の参政に、嫡孫岡田真は洲本文学教授に任ぜられる。・真が家督を継ぐ。	
一九六七		十一月 大政奉還			
一八六六			・阿倍喜平、私塾積小軒を開く。・森田節斉来淡。	岡田鴨里「草莽私記」完成。	
一八六五			稲田邦植、第一六代洲本城代に。		藤澤南岳、家督を継ぐ。
一八六四		八月 禁門の変	稲田植誠、禁門の変に際し皇居を守護し、長州征伐に従軍。	・岡田鴨里、「五倫の説」を記す。・岡田鴨里の女婿の古東領左衛門が天誅組の變に連座して獄死。	藤澤東咳、没。

一八八六	明治十九年	帝国大学令公布		三木善八、社長矢野龍溪にまねかれ郵便報知新聞社に入社		
一八八四	明治十七年			「神戸新報」を吸収して「神戸又新日報」創刊（社長鹿島秀麿、三木善八営業部長）。		
一八八三	明治十六年			五月、徳島立憲改進黨、結党。	岡田文平、帝国文化大学古典講習科漢書課乙部へ入学。	
一八八二	明治十五年	東京大学に古典講習科設置。立憲改進黨が結党。				
一八八一	明治十四年	明治十四年の政変により大隈重信下野。		矢野龍溪は大隈重信と図り郵便報知を買収、同紙は立憲改進黨の機関誌に。	・石濱鐵郎、父徳一の死を受けて家督を継ぐ。・真の遺体が掃部村の鴨里の隣に改葬される。	
一八八〇	明治十三年					
一八七九	明治十二年			十二月、交詢社系新聞「神戸新報」創刊（鹿島秀麿が主幹、三木が代表）	・岡田鴨里、掃部村で没。・鴨里の女婿、岡田文平が家督を継ぐ。	
一八七八	明治十一年			五月、徳島立志社、設立。	岡田鴨里、掃部村に帰郷。	
一八七七	明治十年	四月十二日、東京大学創設。		九月、阿波自助社、閉社。		
一八七六	明治九年	西南戦争		阿倍喜平が「淡路新聞」創刊。門下に三木善八、鹿島秀麿。	岡田真、東京にて客死。海禪寺塔頭智光院に葬られる。	
一八七五	明治八年	四月 漸次立憲体制樹立の詔		四月、自助社が「通論書」を発行。七月、自助社が徳島慶應義塾を徳島に誘致。	岡田真、東京にて客死。海禪寺塔頭智光院に葬られる。	
一八七四	明治七年	一月板垣退助が「民選議員設立建白書」を提出。四月、土佐に立志社を創立。		八月、阿波に自助社設立。鹿島秀麿、慶應義塾入学。	・岡田鴨里、「草莽私記」の序文を記す。・岡田真、阿波自助社の発起人の一人に。	藤澤南岳長子、黄鶴生誕。

二つの石濱家に見る幕末から大正期の淡路の先進性について

一八八七	明治二〇年				岡田文平、同課を卒業。	石濱純太郎、豊蔵の長子として生誕。
一八八八	明治二二年	大隈重信外務大臣に。			石濱鐵郎、慶應義塾、別科入学。	石濱豊蔵、丸石商会創業。
一八八九	明治二二年	大日本国憲法が公布。			石濱鐵郎、慶應義塾、別科入学。	
一八九〇	明治三三年	第一回衆議院選挙	鹿島秀磨、衆議院議員に。		・岡田文平、第二高等中学校助教に任ぜられる。・石濱鐵郎、慶應義塾卒業。	
一八九一	明治二四年			岡田文平、同校教授に昇進。		
一八九四	明治二七年	日清戦争（一八九五年）	三木、社主となり「報知新聞」と改題し大衆化する。	岡田眞の次女イマが石濱鐵郎に嫁す。	石濱鐵郎とイマの間に知行生誕。	石濱純太郎の生母没し、日柳燕石の孫娘が後母となる。
一八九五	明治二八年					石濱純太郎の祖母没し、日柳燕石の孫娘が後母となる。
一八九七	明治三〇年	京都帝国大学の創設に伴い、帝国大学を東京帝国大学と改称し、文学部は文化大学（一九一九）と呼ばれる。		岡田文平、病により同校を辞職。	石濱鐵郎とイマの間に知行生誕。	石濱豊蔵、純太郎を泊園書院に入学させる。
一八九八	明治三一年	大隈第一次内閣			石濱鐵郎、イマの間に知行生誕。	
一八九九	明治三二年					
一九〇〇	明治三三年			岡田文平、没。鐵郎、卒業生名簿で時事新報社員となる。		
一九〇一	明治三四年	福沢諭吉、没。				
一九〇二	明治三五年		永田秀次郎洲本中学校校長になる。			石濱純太郎の姉カツが藤澤黄坡に嫁す。
一九〇四	明治三七年	日露戦争（一九〇五）		眞の妻セン没。		藤澤恒夫、生誕。

一九〇八	明治四一年		三木善八「東京毎日新聞」を買収。	・石濱純太郎、東京帝国大学文科支那文学科入学。・藤澤黄鶴、衆議院議員に当選。
一九一〇	明治四三年	韓国併合		岡田秀夫、東京帝国大学文科卒業。
一九一一	明治四四年		大内兵衛、東京大学法学士経済科入学。	・石濱純太郎、東京大学文科支那文学専修卒業。家業を継ぐ。・藤澤黄鶴、「南北朝正閏問題」をめぐり議員辞職。
一九一三	大正二年		大内兵衛、東京大学法学士経済科卒、大蔵官僚に。	
一九一四	大正三年	第一次世界大戦（一九一八年）、第二次大隈内閣（一九一四）		岡田秀夫、札幌帝国農科大学講師に。
一九一五	大正四年		阿倍喜平、没。	岡田鴨里、大正天皇即位にあたり従五位を追贈。
一九一六	大正五年			岡田秀夫、広島高等師範学校講師に。
一九一七	大正六年			川端康成、石濱金作一高において出会う。
一九一八	大正七年			岡田秀夫、同校の教授に昇任。
一九一九	大正八年	文化大学、東京帝国大学文学部へと改称。	大内兵衛、新設の東京帝国大経済学部助教授に着任。	
一九二〇	大正九年		大内兵衛、森戸事件に連座して大学を免官。	・石濱金作、川端康成、東京帝大英文科に入学。第六次「新思潮」を発刊。・石濱知行、東京帝国大学法学士政治学科卒。
				藤澤南岳、没。

二つの石濱家に見る幕末から大正期の淡路の先進性について

一九三六	昭和十一年	二・二六事件	「時事新報」、「東京日日新聞」に合併され廃刊	・川端康成、文化公論社より「文学界」を創刊・金作、戦後まで創作から遠ざかる。	九石製薬株式会社設立、
一九三二	昭和七年	五・一五事件	鹿島秀麿、没。「報知新聞」講談社に買収される。		
一九三二	昭和六年	満州事変		・石濱秀雄、東京帝国大学経済学部卒。・石濱鐵郎没。	藤澤恒夫、東京帝国大学文学部卒。肺病に罹患し帰阪。
一九三〇	昭和五年			金作、文壇から離れる。	
一九二八	昭和三年	三・一五事件。		石濱知行、三・一五事件で向坂逸郎とともに九州大学を辞職。	
一九二七	昭和二年			石濱鐵郎、報知新聞会計局に在籍。	
一九二六	大正十五年 昭和元年			石濱金作、三男ともに辻馬車に寄稿	藤澤恒夫、東京帝大文学部英文科入学。
一九二五	大正十四年	治安維持法、普通選挙法成立			三月、藤澤恒夫、同人「辻馬車」で文壇デビュー
一九二四	大正十三年		三木善八、社主を退き顧問に。	・石濱金作帝大卒業。・十月「文藝時代」発刊。	石濱純太郎、内藤湖南と生涯唯一の外遊。
一九二三	大正十二年		大内兵衛、同校に復職。	岡田秀夫、北京にて客死。菊池寛「文藝春秋」創刊、金作は「新思潮」同人四名とともに編集同人に加えられる。	石濱純太郎、長子恒夫誕生。
一九二二	大正十一年	大隈重信が死去。・関東大震災。		三月 岡田秀夫、父の死に伴い家督を相続。・石濱鐵郎、報知新聞社に移り用度部長職に。	石濱純太郎、大阪外国語学校蒙古語部へ入学。
一九二一	大正十年			石濱金作、川端康成らと第六次「新思潮」を創刊。	

注

- (1) 平田真玄 一八八六。管理者不詳その他で石濱屋、徳右衛門どちらのグループに属するか不明な墓主も三名いる。
- (2) 淡路古文書学習会編…三三七―三三八。仲野安雄については菊川 一九六六…一一一―一一九 参照。
- (3) この他にも一八四九(嘉永二)年十月十日また、安政年間3月20日の書簡にも、徳右衛門の名前が確認できる(洲本市立淡路文化史料館一九九八: No. 36-4, No. 37-24, No. 40-25, No. 46-14, No. 52-31)。
- (4) 屋敷所在地ならびに登記簿の確認に際しては益習の集いの三宅玉峰会長にお骨折りいただいた。ここに謝意を表したい。また、同会の高田知幸事務局長には淡路の江戸期、新聞史関連の論文を蒐集する際、多くのご協力と御助言を戴いた。深謝したい。
- (5) 石濱鐵郎が管理する墓石の中に文政八年「一八二五」四月二十二日になくなった石濱半兵衛(戒名…真光童子)という名の者がいることも一家の関係を暗示している。
- (6) 八幡エコンスチール株式会社発行、昭和三十七年六月二十五日『ニュースエコン』号外社長追悼号。知行と金作の事績については後述する。
- (7) 四代の詳細な年譜は石濱裕美子二九一六参照。岡田鴨里関連文書の目録は石濱裕美子二〇一六…一二八―一四一

一九四〇	昭和十五年		石濱イマ没。	純太郎「富永仲基」著。石濱恒夫が川端康成と初対面。
一九四一	昭和十六年	太平洋戦争(一九四五年)		石濱恒夫、東京帝国大学文学部美術史学科入学。藤澤恒夫が「新雪」発表。
一九四二	昭和十七年		「報知新聞」が読売新聞に合併。	純太郎「浪華園林伝」著。
一九四三	昭和十八年			純太郎「東洋学の話」著。
一九四五	昭和二十年	終戦	大内兵衛、石濱知行名譽回復。	

に掲載されている。概要としてはA・E群が岡田鴨里の著作とその資料群、G群が真、H群が文平、I群が秀夫の著作群であり、L群の雑物、IIの追加にも鴨里以後の岡田家の動向を示す文書類が含まれている。

(8) 鴨里の生家である砂川家は兵庫県淡路市王子五七四に現存する。岡田家は藩より御銀主の身分をもらった豪商であった(岡田周輔成立書)。

(9) 以上は「日本外史補」の序文に基づく。外史補の自筆の草稿、完成稿は岡田鴨里関連文書B群、使用した資料類はC群である。

(10) 「岡田周輔成立書」によると、鴨里が中小姓格となつて独立した後、岡田家の家督は長女の婿、与一郎に譲られた。同成立書は岡田家の由来、鴨里の二人の妻、三人の娘の嫁ぎ先、長女の婿であり養子の与一郎の実家などの情報も提供している。

(11) 一例として岡田鴨里関連文書No. 8の頼三樹三郎の軸装書簡が挙げられる。

(12) 天誅組の挙兵の二ヶ月前の六月、鴨里は「五倫の説」を記している(岡田鴨里関連文書No. 20)。古東領左衛門については菊川一九六六・一二〇―一二七参照

(13) 京都大学附属図書館谷村文庫に木戸孝允の蔵書印「長門桂氏圖書之記」の捺された「日本外史補」と「名節録」が所蔵されている。

(14) 岡田鴨里関連文書A群は「蜂須賀家記」の未完稿と資料類である。

(15) カツは鴨里の実家砂川家に、ヤスは前述のごとく津井村の庄屋古東領左衛門に嫁いだ。これら三家と鴨里の子孫との関係については石濱(二〇一六)を参照。

(16) 魚石(純太郎の雅号)「好治問事室藏書記」【泊園】五十五・一九四二年一月三十一日。本記事は吾妻重二教授にご教示賜った。謝意を表したい。

(17) 真と純安の関係は鹿島秀磨 一九九一・二五三・洲本市史編纂委員会・六八四・六八五参照。庚午事変の檄文は岡田鴨里関連文書II No. 768にも収録されている。

(18) 官歴については岡田真墓誌に主に基づく。

(19) 明治七年八月三日に結社の届け出をだしたのは賀川純一(賀川豊彦の父)、新居敦二郎、湯浅直通、藤本文策、岡田

- 直（真）、高井幸雄、井上高格七人である（明治七年九月十一日付『徳島新聞』）。
- (20) 奥井寒泉は藤森弘庵（一七九九—一八六二）門下の淡路の朱子学者であり、益習館の儒者篠崎小竹（一七八一—一八五一）の親友奥井中里（一七八四—一八四六）の子息である。古東又五郎と岡田家の関係については系図を参照。
- (21) 入社帳の記録では住所の後に「戸主士族」とあり、下宿先と思われる「芝区愛宕下八巻町目四番地 平井 断方」が記されている。卒業の記録は「明治二十三年卒業名簿」で確認できる（福沢関連資料 K5-A01-01）。
- (22) 明治二十九年の住所の典拠は「卒業生現在生 姓名録」（福沢関連文書 K5-A08-01）による。四国町の名はかつて四国大名の家臣の家が多かったためにこの名がついた。明治三十三年の情報の典拠は「慶應義塾塾員姓名録」（福沢関連文書 K5-A09-01）による。